慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奇数で嘘をつけ : ラブレーをめぐる嘘と本当の話
Sub Title	Il faut mentir par nombre impair-propos vraiment invraisemblable à propos de Rabelais
Author	荻野, 安奈(Ogino, Anna)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.162(195)- 173(184)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0173

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奇数で嘘をつけ
ラブレーをめぐる嘘と本当の話

荻　野　安　奈

1．ラブレーいわく

青天の霹靂のように，その言葉は降ってきた。宮本輝氏と対談中のことである。氏は筆者がrabelaisanteであることをご存じのようで，さりげなく話をこちらの専門の土俵に持ってきてくださった。

「ラブレーにこんな言葉があるそうですね。三つの真実よりひとつの美しい嘘を」

「えーっ!!　ラブレーはそんなこと，言ってませんけど」

「えーっ!!」

二の句がつげずに，お互いの目が点になっているのを確認しあう，という奇妙な一瞬を体験した。唐突にせき止められた話は次の瞬間には別の岸辺に向かって流れ始め，関西独特の間が心地よい宮本氏の巧みな話術にリードされて，対談の終わる頃にはラブレーの一件はすっかり記憶から落ちていた。

数日後，宮本氏から封書が届いた。大先輩から直々のお手紙である。読む前からどきどきしている。読んでいくに従って，心拍数は急カーヴを描いて上昇した。氏は開高健の「フィッシュ・オン」を読まれて，例のラブレーの言葉に再び出会ったそうである。問題の箇所が引用してあった。

〈釣師をさしてホラ吹きだというよくある批評はネコをさしてニャオーといって鳴くという程度の指摘にすぎず，精神の貧困もいいところである。よしんば釣師があきらかにホラと判別できるホラを吹いたところで，やっぱりその批評は貧困である。《三つの真実にまさる一つのきれいな嘘

を！》という名句がラブレーにあると知っていただきたいものである。これは文学の妙諦でもある[1)]〉

開高健の言に加うるに，宮本氏ご自身が「三つの本当のことよりも，たった一つの美しい嘘を」と訳されたものをどこぞでお読みになった記憶がおありだという。

さて，と自分の頭を逆さにして振ってみた。二十年近くラブレーの文章に接してきたつもりであるが，この言葉を目にした記憶がとんとない。いわゆる名句として流布しているラブレーの言葉は多々ある。いわく「笑うはこれ人間の本性」なり。いわく「欲することをなせ」。いわく「良心なき智識は霊魂の荒廃」なり。しかし，「三つの真実」とは初耳であった。わけがわからないまま，何か変だ，という思いのみ強まる。

さりとて，と思いなおす。いくら二十年の付き合いとはいえ，全作品の一言半句にいたるまで，すべからく頭の記憶袋にしまいこんでいる，というわけにはいかない。失念している部分があって当然である。人からこのようなラブレーの言葉があると聞けば，見覚えが無ければ後で確かめるのが順当なはずである。それを，反射的に「言ってませんけど」と否定した。自分でも驚くほどのとっさの拒絶は何だったのか。

それは脳の，意識で統制できない部分からのダイレクトな反応であった。いわば意識と無意識のはざま，ぐらいのところに，ラブレーを中心としてルネサンス期のさまざまな言葉が澱のようによどんでいる。その澱の層に「三つの真実」という言葉が放りこまれてみると，水の中の一滴の油として，決してなじもうとはしなかったのである。

それだけでは，勘と直観の領域に属する話である。直観で済ませてしまっては，宮本氏が投げて下さったボールをひょいと避けたまま，自分からはサーブもせずにつっ立っている間抜けなテニスプレイヤーといったところである。宮本氏は改めて開高健の引用という貴重なボールを投げて下さった。今度こそ正面からボールを受け止めねば。直観から学問のトバロへ続く，一本の道が見えてきた。

2．メリメ登場

直観から学問へ。学問の基本は飽くなき調査と心得ている。とはいうものの，漠然とラブレーのページを繰って問題の言葉につきあたるのを待っていては日が暮れる。こういう時に便利なはずのコンコルダンスを，こういう時になってしまってから，あわてて本屋に注文する。在庫はない。取り寄せてもらうことにする。航空便か船便か。船便なら二カ月と言われたにも係わらず船便にした貧乏性を，その日からしきりと後悔することになる。

本の到着を待ちながら，とりあえずは引用辞典を引きまくった。著者別の索引でラブレーにあたり，次に項目別で嘘と真実に関するものをシラミ潰しにした。ラブレー本人からは何も出てこなかったが，意外な著者がラブレーを援用して文学における嘘を語っている場面に出くわした。メリメの「アレクサンドル・プーシキン」の一節である。

〈すべて大ぼらというものは委曲をつくした細述というものが必要なのであって，それがありさえすれば大いばりで通用する。それゆえわれらが師ラブレーが「奇数を用いて瞞着することが肝心じゃ」という立派な戒律を遺されたのも故なしとしない[2)]。〉

片や「三つの真実」と一つの「嘘」。こちらは「奇数」で嘘をつけ，という。そういえば，三と一は奇数である。あせってはいけない，と自らをたしなめつつも，ついつい短絡的に思考が走りそうになる。

奇数を用いて瞞着せよ→奇数＋瞞着が肝要→奇数＋真実より嘘が肝要→三つの真実より一つのきれいな嘘を！

というふうに話がつながってくれれば，と期待する気分になっている。

次なる作業としては，「奇数…」（原文では〈qu'il faut mentir par nombre impair〉）がラブレーのどこに出てくるのか，確認を取らねばならない。引用辞典ではさすがに又引きの引用の出典までは無理である。メリメ全集にあたってみると，問題の引用部分に注が付いていた。

〈「奇数を…肝心じゃ」——出所不明。ただジャン・プラタールの言によれ

ば「荒唐無稽もはなはだしい絵空ごとを微に入り細をうがった叙述をもってするラブレーの癖からすればじゅうぶんに考えられる」ことであって，例えば『パンタグリュエル』第二十一章の「宮殿まえの広場の群衆は一、八五六、〇一一人の多きにのぼっている」とあるのがそれだという[3]。〉

「出所不明」とは，つれないお言葉。しかし，と気を取り直す。ジャン・プラタールを調べれば「奇数…」についての言及が見つかるはずである。手に入る限りのプラタールの著作に目を通してみた。一九世紀におけるラブレーの理解者としてメリメの名は挙がっているものの[4]，上記のような言はどこにも見当たらなかった。

「三つの真実」と「奇数」。共に名句である。前者の出所を確かめるつもりで，出自の曖昧な後者をしょいこんでしまった。二つの怪しげな名句よりも一つの確実な引用を！　と言いたいところだが，ここでひとつ，問題がある。

最初に「三つの真実」を耳にした時，反射的にラブレーではない，と思った。ところが「奇数」のほうは，プラタールではないが「じゅうぶんに考えられる」という印象を受けた。出典を明記されていない，という点で，この二つの句は同じ条件にあると考えてよいだろう。にも係らずこちらの反応が正反対になったことに，何らかの根拠はあるのだろうか。

この段階では飽くまで印象のレベルで話を進めるしかないのだが，「三つの真実」にはどことなく近代くさいものを感じたのだった。先程の引用辞典の「嘘」の項目には，文学におけるフィクションとしての「嘘」を語ったものもあり，中には「三つの真実」を敷衍したかのごとき文章もある。以下に引いてみよう。

〈筋を追い，表面を取り繕うだけでは，小説と呼ばれるものに深みを与えるに十分ではない。小説においては発想し，創造せねばならない。つまり嘘をつかねばならないのだ。小説のコツは嘘をつく術を心得ることである[5]。〉

発想の根が「三つの真実」と同じ土壌から伸びている，という感じだ。

そしてこの文の作者は，ルイ・アラゴンなのである。

近代が小説というツクリモノに真実を求めるからこそ，嘘という言葉を用いてそのフィクション性を強調するのかもしれない。小説なるジャンルを未だ知らない時代に，あらゆるホラが許される物語世界の中にあって，フィクションの重要性を説く作者，というのは像が結びにくい。

対する「奇数」のほうであるが，これは前後のコンテクストによっていかようにも理解しうる可能性を含んでいる。プラタールの言にあるような，滑稽な細密描写としての数への執着かもしれない。あるいはピュタゴラス派のごとく数に象徴的な意味合いを持たせている，とも考えられる。ラブレー自身の中に両方のケースが見受けられるのであるが，前者ならファルス的技巧として中世につながるものであるし，後者の場合は古代哲学にまで遡る。いずれにせよ近代小説とは拠って立つ所が異なる分だけ，ラブレー的なリアリティを感じさせる，ということだ。

コンコルダンスの到着を待ちながら，様々な「感じ」に翻弄され，仮説に仮説を積み重ねて，徒に日は過ぎていった。

3．ウッソー！

約束の二カ月を疾に過ぎ，三カ月めも月末にさしかかったところで，ようやく本[6]が届いた。予想外の大型本。目にしたとたん，小錦化した広辞苑，と思った。とても片手では持ち上がらない厚さと重みである。航空便にしなくてよかった，と胸をなで下ろしたのだから勝手なものだ。

さっそく問題の名句に出てくる単語を一式調べてみた。vérité, vérissime などの「真実」関係。mensonge, menteries, mentir などの「嘘」関係。ついでに trois, nombre, fault, impar と一通り網羅した。

まず数に関する単語であるが，単なる数詞以上の意味を持って登場する場面は意外と少ない。そのほとんどが「ピュタゴラス派の教説」に基づいたものであり，当時このような「数の象徴的な意味に関する哲学的な或いは通俗的な解説書は極めて多かった[7]」由である。

幾つか例を挙げよう[8]。「第三之書」第二十章では五が「婚姻数」である

旨の説明がある[9]。第二九章では「ピュタゴラス哲学」の「聖なる四という数」に鑑みて招待客の選定をしている[10]。「第四之書」第三七章では「名前の綴字が奇数であるか偶数であるか」によって体の左右どちら側が病気等の不幸に見舞われるか判明する，という「ピュタゴラスの賞讃すべき思いつき」が紹介される[11]。

それぞれに意味深長であり，このコンテクストの中に「奇数にて嘘をつくべし」という「戒律」が入ってきても何ら偉和感はなさそうであるが，残念ながら問題の句はついに見あたらなかった。

さて今度は「真実」と「嘘」に関する単語である。結論から先に言おう。ラブレーの場合，「嘘」の意味するところが二つのレベルにはっきりと分かれているという印象を持った。第一のレベルでは「嘘」について，物語世界の価値観で語られている。第二のレベルはより一般的な価値観に近い。これも又，具体的な例を出して検証してみたい。

第一のレベルとは，言い換えれば，物語作者が自作の信憑性を吹聴する際の言説である。当然，注目すべき箇所は「作者の序詞」ということになる。「第一之書」に先立って書かれた実質上の第一作である「第二之書」から見ていこう。作者はまず先行作品である「ガルガンチュワ大年代記」の効用をひととおり述べたてから自作の宣伝に移っている。たしかに自作は「大年代記」と同じ「地金（ピーヨン）」で出来ているが，「例の物語と較べると，ちょっとばかりはできもよいし，信用するに足るもの」[12]である。その「信用」度をアピールするために，ラブレー作品において初めて「嘘」という単語が用いられている。

〈私は，（略）嘘をついたり或いは真実ならざることを確かだと誓ったりしたことは一度たりとない。（略）

されば，この序の言葉の結びとして申すが，もし私がこの物語全篇に亙り，僅か一言でも嘘を申していたならば，身も魂も，五臓も六腑も，十万籠もの凄い悪魔にかっ掠われてもかまわぬと誓言いたす[13]。〉

一度として嘘をついたことがない，という最大の嘘を最初にぶつけてしまうことで，読者のほうには以後何を聞かされても驚かない心の準備が出

来る。「本人が本当だと言っているのだから，本当ということにしておきましょう」という暗黙の了解が，こうして作者と読者の間に成立する。

ホラ話としての物語空間に読者をいざなうにあたって，信憑性あるいは虚構性のいずれかを強調する，というのは常套である。この際「このウソはホントだ」と言うにせよ，「このウソはウソだ」と言うにせよ，得られる効果に大差はない。たとえば，と一挙に紀元二世紀まで遡らせていただく。ラブレーの先輩格のルキアノスは彼の「本当の話」において，冒頭からウソ＝ウソ派の姿勢を取っている。

〈(略)この一つのことだけは正真正銘間違いがないと申し上げられる。それはすなわち私の話がまったくのつくりごとだということで，(略)[14]〉

と，ここまで言い切ってしまえば，後は「牛乳の海」や炎の川，果ては夢の住む島の話まで，縦横に話を飛ばさないほうが逆に読者への礼を欠くことになるだろう。

ウソ＝ホント派の一例を，今度は十六世紀から。先行するラブレー作品の影響のもとに書かれ，書かれるなり次のラブレー作品に影響を与えた，という奇妙な運命を持つ「パニュルジュ航海記」である。当時の物語文学の慣習で「航海記」の実際のタイトルはやたらと長いのであるが，その副題の一部には「驚くべく信じ難いさまざまなことがら。これらを当人は自ら見たと称して本書に記し留めている」とある。「信じ難い」ことを真と称する作戦を作者自ら白状しているわけである。続く「序詞」では「真実」という言葉が少なくとも半ダースは繰り返され，作者は自らを「真実の女神の財務官」をもって任じている。第一章ではプリニウスにルキアノスといった先達を「大嘘つき」呼ばわりした挙げ句，以下の自信満々の台詞となる。

〈この私こそまぎれもない真実の模倣者であること，また，私の言うことには，実にどっしりした確からしさがそなわっているから，これを不敵にも咎め立てするような連中はことごとく，必ずやあらゆる真の史家たちの真正面からの非難を蒙り，嘲罵を受けるに相違ないということだ[15]。〉

それからおもむろに「本題」であるところの航海譚，バターの山がそびえ葡萄酒の川の流れる島々の話となるところはルキアノスそのままである。

ルキアノスの徒(Lucianisant)，とラブレーが同時代人から称せられていたのも故なきことではない。先程の「嘘」の一言をこうしてルキアノス本人や「パニュルジュ航海記」と並べてみると，彼の作品がそもそもの始めからルキアノス的な伝統につながるものとして自らを位置づけていることがわかる。

第二作めの「第一之書」に移ろう。本文中では，主人公の巨人ガルガンチュワが母の左の耳から誕生する奇怪なシーンで，「性(さがら)善き人，分別ある人ならば，他人の言ったことや書物で読んだことは，常にこれを信用するのが当り前[16]」という無茶苦茶な理論を展開し，前作と同じホラ話の土壌に立つところを見せている。ところが「序詞」における嘘の扱いを見る限り，新たな方向性もほの見えてくるのである。

序詞は二つの比喩で始まっている。外は滑稽な飾りで覆われ，中には霊薬が入っているという「シレーノスの筥(はこ)」。そして外見は醜男，中身は英知の人ソクラテス。作者がこれらの譬えを持ち出してきたにはわけがある。というのも，読者が「愉快な標題」の本を前にすると，

〈内容には，ただ揚げ足とりや戯れ話や痛快な嘘八百ばかりしかあるまいと早合点されすぎるからではある[17]。〉

たとえ本文中で「愉快なお話」に遭遇したとしても，それを「一段と高い意味に解読せねばならない[18]」という時，作者はすでにホラ話のレベルから微妙に逸脱しかけているのではないだろうか。「嘘八百」を真実と称するかわりに，「嘘八百」にこそ真実を読み取れ，というのである。たしかに第一作がある種の読者による悪意の誤読を受けたことからくる晦渋もあるだろう[19]。と同時に，フィクションに託されている意味が前作よりはるかに近代的な様相を示している，と言えるかもしれない。「一段と高い意味」の延長線上に先程のアラゴンの言葉を置いてみたい，という誘惑にかられなくもない。

ところが，である。書くなり前言を翻すのはラブレーの得意技となっている。「一段と高い意味」の存在は主張されるなり拒否され，「こういう見事な空っぽ話を諸君に御馳走申す乾酪（チーズ）のような脳味噌を畏敬されるがよろしい[20]」という口上で「序詞」は閉じられる。片足は踏み出しながら，かろうじて第一のレベルに止まった，というところだろうか。

さて，いよいよ第二のレベルである。リュシアン・フェーブルはラブレーの宗教を論じるにあたり，彼の文章にいかほどの真意がこめられているか検証し，「嘘」の問題にも触れている。フェーブルが具体的に引用しているのは次の二箇所である。

〈「なんぢは虚偽をいふ者を滅ぼしたまふ」[21]〉

〈嘘佯りと知つて嘘をついたり（略）いたすことは，軽少な罪科とは申せない[22]〉

ラブレーが作中でキリスト教徒として発言するのは自身の反宗教的立場の隠蔽工作である，という見方がある。これに対してフェーブルは上記の引用を示し，かように虚偽を告発する者が作中で自ら虚偽を並べたてるものだろうか，と反論する[23]。

ラブレーの宗教観はそれとして，ここで問題にしたいのは，フェーブルもまたラブレーの嘘の中に二つのレベルを見ている，ということである。先程の「第二之書」序詞に見られるような「嘘」を，フェーブルは「香具師の口上」（boniment）と同様のものと考える。中世文学の流れをくむ「口上」は脇に置いて，フェーブルはラブレーがより「近代的」な口調で語る部分に思想上の本音を読み取ろうとしている[24]。

第二レベルが「近代的」であるか否かは別として，より思想的な位相を持っていることは確かのようだ。ラブレーの物語作品を前期（「第二之書」，「第一之書」）と後期（「第三之書」，「第四之書」）に分けた場合，こと「嘘」に関する限り，前期から後期への移行は，第一レベルから第二レベルへの移行と重なっているように見受けられる。前期においては，ニュアンスの違いこそあれ，「嘘」という言葉は序詞の中で作品のアリバイを成立させるために使用されてきた。「第三之書」に至ると序詞から「嘘」が消える。そ

の代わり本文中で借財と並ぶ悪徳として主人公の巨人に弾劾されることになるのだ。

〈(略) 拙者は，ペルシヤの人々が，佯(いつわ)りを言うを以って第二の悪徳とし，第一の悪徳は借財にあると考えたのは至極もっともと考える。何となれば，借財と嘘言とは提携し合って行くのが普通だからだ[25]。〉

巨人の「拙者」を等身大の「私」に置き換えてみる。それだけでモンテーニュ風の文章に見えてくるから不思議である。本物のモンテーニュが嘘について論じると、以下のようになる。

〈嘘をつくことは下劣な悪徳だ。ある古人は，それは神を軽んじ，同時に人間をおそれる証拠となるものだ，と言って，嘘をつくことをひどく恥辱に満ちたものとして描いている[26]。〉

後ろに先程のラブレーの引用を続けても，何ら違和感はないだろう。ところで，この「嘘を言うことについて」というエセーの中で，モンテーニュは嘘について語りながら，いやむしろ嘘を語ることによって，彼の創作についても語っているのである。「この本は，その著者と同質のもの」だ，「わたしの生活の一部分なのだ[27]」と言い切る著者が次のように慨嘆する時，嘘と真実は新たな相貌を持って現れ出る。

〈しかし，われわれは，これほど堕落した時節に，自分のことを語る誰を信用できるだろうか[28]。〉

それでもモンテーニュは「自分のことを語る」ことを止めようとはしない。大文字の真実(Vérité)をあきらめる代わりに，せめて自分という小文字の真実(vérité)の確立を目指し，書くことと生きることが同義であるような「信用」に足る作者たらんとして。

モンテーニュの横に，読者に「信用」を要求する物語作者としての初期のラブレーを置いてみる。一六世紀の懐の深さに愕然とすると同時に，あり得ない一つの仮定を立ててみたい，という要求に駆られる。先程は「第一之書」の序詞にある種の近代性を認めつつ，アラゴンへと至るひとつの道程を想定してみた。もしラブレーのフィクションとモンテーニュの内省が一冊の中に共存していたならば。モンテーニュが自身への問いかけを虚

構の中で展開することを始めたならば。一六世紀にひとりの「小説家」が誕生していたかもしれない。

嘘と真の間をさまよい歩いた挙げ句，結局小説というものの定義にたどり着くしかないのだろうか。

それはそれとして，ここまで来てはっきりしたことはただ一つである。「三つの真実にまさる一つのきれいな嘘を！」も，「奇数で嘘をつくべし」も，そのままの形ではラブレーの中には見当たらない，ということだ。不確実から出発して不確実へ返る。開高流に言うと，これも「文学の妙諦」かもしれない。

注

1） 開高健著「フィッシュ・オン」，新潮文庫，1974年，p.32-33。

2） 「アレクサンドル・プーシキン」in プロスペル・メリメ著，江口清他訳「メリメ全集6　人物評論　美術評論　紀行文」，河出書房新社，1979年，p.81。

3） 前掲「メリメ全集6」，p.429。

4） voir Jean Plattard, *La vie et l'oeuvre de François Rabelais*, Paris, Boivin, 1939, p.127. 更に河出版メリメ全集の原典にあたってみたところ，問題の句がラブレーには存在しない，と明記されていた。またプラタールの言は著書よりの引用ではなく，本人がメリメ全集の編者に伝えたものであることも判明した。(voir *Études de littérature russe*, in *Œuvres complètes de Prosper Mérimée*, édition critique par Henri Mongault, Paris, Champion, 1931, p. 176.)

5） Pierre Oster, *Dictionnaire des citations françaises*, Paris, Le Robert, 1990, p. 1323.

6） *Concordance des oeuvres de François Rabelais*, préparée par J. E. G. Dixon et John L. Dawson, Genève, Droz, 1992.

7） フランソワ・ラブレー著，渡辺一夫訳，「第三之書パンタグリュエル物語」，ワイド版岩波文庫，1991年，p.381.。

8） 数の象徴性がより大きな意味合いを持つのは「第五之書」においてであるが，「第五之書」は authenticité の問題が解決を見ない以上，この考察からは外すことにする。

9） 前掲「第三之書」，p.129。

10） 前掲「第三之書」，p.177。

11） フランソワ・ラブレー著，渡辺一夫訳，「第四之書パンタグリュエル物語」，

ワイド版岩波文庫，1991年，p.188。

12) フランソワ・ラブレー著，渡辺一夫訳，「第二之書パンタグリュエル物語」，ワイド版岩波文庫，1991年，p.18。

13) 前掲「第二之書」，p.18-19。

14) ルキアノス著，呉茂一他訳，「本当の話」，ちくま文庫，1989年，p.11。

15) 作者不詳，渡辺一夫・荒木昭太郎訳，「パニュルジュ航海記」in「筑摩世界文学大系74　ルネサンス文学集」，筑摩書房，1964年，p.190。

16) フランソワ・ラブレー著，渡辺一夫訳，「第一之書ガルガンチュワ物語」，ワイド版岩波文庫，1991年，p.50。

17) 前掲「第一之書」，p.18。

18) 前掲「第一之書」，p.19。

19) 前掲「第一之書」，p.266。訳者によると，「第一之書」の「序詞」は「悪意或いは無理解による誤解を受け始めたラブレーの弁明が一つの主題となっている」。

20) 前掲「第一之書」，p.22。

21) フランソワ・ラブレー著，渡辺一夫訳，「パンタグリュエル占筮」，高桐書院，1947年，p.70。

22) *ibid*.

23) Lucien Febvre, *Le problème de l'incroyance au* 16e *siècle, La religion de Rabelais*, Paris, Albin Michel, 1968, p.244.

24) Lucien Febvre, *op. cit*., p.457.

25) 前掲「第三之書」，p.56。

26) 荒木昭太郎著，「人類の知的遺産29　モンテーニュ」，講談社，1985年，p.278-279.

27) 前掲「人類の知的遺産29　モンテーニュ」，p.275。

28) 前掲「人類の知的遺産29　モンテーニュ」，p.277。